

松戸市の都市化

花 島 正 子

松戸市は千葉県北西部に位置し、昔は宿場町、港町として栄えたが、現在は東京の衛星都市としての性格を強めている。人口も昭和35年～40年にかけて急激に増加し人口増加率85%となっている。昭和46年10月現在人口273,106人で千葉県下で中堅都市になった。こうした人口増加の主因は社会増加によるもので、転入者は主に都区部からの者によって占められている。転入者の通勤先は7割が東京都内である。このように松戸市は東京から流出する人口を受け入れ、しかもこのようにして入ってきた人々は、昼間は通勤通学の形で東京都へ流出しているのである。すなわち松戸市は東京の衛星都市なのである。

都市化は農業にも変化をもたらした。松戸市は以前は近郊農業地帯として東京に野菜（特にねぎ、みつば）を供給していた。それが昭和35年に日本住宅公団常盤平団地ができたのを始めとし東部の畑作地帯である台地上に住宅が広がっていった。西部の沖積低地のほうは住宅地としては不適なため水田として残っている。畑作地帯では専業農家が多く、経営規模も大きい水田地帯では兼業農家が多く経営規模も小さい。今後いかに都市化に対応していくかが課題である。

松戸市の工業の発達もめざましく、昭和35年と比べ45年では事業所数は2倍、従業者数は7倍、製造品出荷額は35倍という伸びを示している。第2次産業率も42.0%で松戸市は工業都市であると言ってもよいだろう。市内には3つの工業団地があって（北松戸工業団地・稔台工業団地・松飛台工業団地）そこには大規模な工場が集まっていて、金属製品・紙パルプ加工品・機械などを生産している。従業者は半数以上が市内の人で占められており、 $\frac{1}{4}$ が徒歩で通勤していることから離農した人たちが近くの工業団地へ勤めているものと思われる。

商業は都心からあまり離れていないという点からも、購買力が東京へ流出してしまいがちである。商店数は増加しているとはいえ、日用品の供給にとどまって多くの購買力は東京に吸収されつつある。これを防ぐには大型百貨店の進出をはかり、商業中心を形成すべきである。現在長崎屋、扇屋が松戸駅前に進出しているが、松戸駅周辺に拠点を形成し、東京への流出を食いとめるべきである。

市街地の拡大を見ると明治時代には松戸駅の西側に带状に広がっている。これは宿場町として栄えていたためである。大正時代には西側の低地部に市街地が広がり、地方都市としての機能をもつ

た時期であった。現在の市街地は東部の台地上に広がり、大都市東京の衛星都市的機能をもった時期である。

松戸市の衛星都市的側面は今後さらに強化されるものと思われる。その中で都市化に対応した農業経営を今後いかに存続させていくかが松戸市の課題であるといえよう。

鹿児島市の都市地理学的考察

松下 恭子

本論文の調査地域は行政地域鹿児島市である。この中でも市街地からはなれた新興住宅地を郊外住宅地として調査した。鹿児島市は九州の南端近くにあり、薩摩半島と大隅半島を分かち鹿児島湾の西岸の中央よりやや北部にある。人口は年々増加の傾向にある。郊外住宅地の地質はほとんどがシラスである。シラスは主として白色砂質で軽石を多く含む火山噴出堆積物であり、鹿児島県では離島を除く県本土面積の約49%を占めている。シラス地帯の地形はテラスのような台地状をなしている。他の地質よりも水に弱く100mmから150mm未満の集中的強雨で崖崩れが生じる。

郊外住宅地化はここ4～5年間に急激に伸びてきており、その広がり方は無秩序でところかまわず行なわれている。しかもその事業主は公共団体であり、民間業者も少なからずあるが規模からすると小さい。このように住宅地が郊外へ伸びていったのは過疎県でありながら人口増加を続ける鹿児島市の特異性であろう。即ち三方を山にかこまれ平野部が狭いので必然的に住宅地は周囲のシラス台地、あるいは斜面に住宅地を造成しなければならなくなったのである。

郊外住宅地と一口にいっても昭和30年代初めに着手された紫原団地とその後の他の団地とは明らかに異なっている。紫原団地は長期にわたって少しずつ開発されて、一部のアパート群を除くと、住宅は個人が自由に建てたものである。ところが他の団地では一時期に集中してつくられ住宅も同じ形、色のプレハブが多くみられる。これは開発する方が土地だけでなく、家屋まで作って分譲するためであろう。住宅地は郊外へ伸びていったが公共交通の便はあまり確保されていない。多くの団地ではマイカー通勤者が団地居住者の約 $\frac{1}{3}$ 程度を占めている。団地内は広くまっすぐな道路も従来の道路へいくと狭く、マイカーによる渋帯をきたしている。

商店街は団地内商店街と鹿児島市中心商店街では業種に差異がみられた。団地内商店街は団地に